Osaka University Knowledge Archive

Title	亜使徒聖ニコライ列聖四十年記念講演会について
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	懐徳堂研究. 2011, 2, p. 93-94
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24669
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

「亜使徒聖ニコライ列聖40年記念祭」記念講演会報告

亜使徒聖ニコライ列聖四十年記念講演会について

湯浅邦弘

それは、「神のお導き」という言葉にふさわしい出来事であった。

平成二十一年、懐徳堂記念会では、創立百周年記念事業の一環として、「懐徳堂史跡マップ」の作成にとりかかっていた。懐徳堂に関係する史跡を、大きくは関西と全国とに分けて、インターネット上に掲載し、また、紙媒体の地図として印刷しようとするものであった。このマップの作成には、主として大阪大学文学研究科中国哲学研究室の関係者が現地調査にあたった。史跡の場所と最寄り駅からの距離を確認し、デジタルカメラで史跡を撮影したのである。

そうした史跡の中の一つに「大阪ハリストス正教会」があった。

日本ハリストス正教会は、一八六一年にニコライ大主教が函館のロシア領事館付の司祭として来日した時ははじまり、明治初期には大阪に正教が伝えられたとされる。明治四十三年（一九一〇）、大阪天満橋に木造ビザンチン式の聖堂が建立され、「生神女庇護聖堂」と名付けられた。昭和二十年（一九四五）、戦災により焼失。その後、昭和三十七年（一九六二）に現在の吹田の地に新しい聖堂が建てられ、前聖堂と同じく「生神女庇護聖堂」と名づけられた。現在の大阪ハリストス正教会である。

中井桐園の長男で、中井竹山・履軒の曽孫に当たる中井木菟麻呂（一八五五～一九四三、木菟麿とも表記）は敬虔な正教徒であり、大阪正教会の信徒であった。木菟麻呂は、正教会の聖書や祈祷書類をニコライ大主教と共に日本語に翻訳したことで知られる。教会の会館には、中井木菟麻呂の肖像画や関連資料が収められている。

こうした情報を得た我々は、この大阪ハリストス正教会を取材することとし、中国哲学研究室の博士後期課程

修了者草野友子が現地を訪れた。

対応に出られたのは、教会の司祭ダヴィド水口優明神父であった。来訪の旨を伝えると、水口神父は、実は、こちらから大阪大学に何とか連絡を取りたいと思っていたところであったとおっしゃった。

それは、平成二十二年（二〇一〇）がニコライ列聖四十年にあたる記念の年で、聖書翻訳に尽力したニコライと中井木菟麻呂の偉業を讃える講演会を、大阪大学との共催で開催したいと計画していたと考えられていたからであった。

こうして以心伝心ともいうべき出会いによって、事態は急速に展開し、その後、水口神父が大阪大学に来学され、講演会の骨子を検討した。そして、二〇一〇年十月九日（土）に大阪大学豊中キャンパス文系総合研究棟三〇一教室を会場として講演会を行うことが決定したのである。

講演会当日、参加者は二百二十名の多数にのぼり、大阪大学を代表して筆者が開講の挨拶を述べた後、講演会が始まった。講演者は、在ロシア日本大使館広報文化部現地職員のアレクセイ・ポタポフ氏、および大阪ハリストス正教会の水口神父である。三時間におよぶ講演会であったが、内容はきわめて充実したもので、ハリストス正教会関係者は、改めて正教会と懐徳堂との関係を再認識され、また、大阪大学・懐徳堂関係者は、中井木菟麻呂が思わぬところで高く顕彰されている事実を知ったのである。

以下では、このお二人の講演の模様を記録した。原則として、講演を記録したビデオ画像をもとに、いわゆるテープ起こししたものであるが、お二人が板書された内容や使用された画像の一部は割愛している。